へ 13
3231
1

式亭三馬戯作

歌川國直戯寫

雙鶴堂梓

癖物語

癖所謂

絲の字の魁

式亭三馬戯作 浮世風呂 初編

浮世床 初編

浮世風呂 二編

浮世床 二編

浮世風呂 三編

浮世床 三編

浮世風呂 四編

浮世床 四編

浮世風呂 五編

浮世床 五編

浮世風呂 六編

浮世床 六編

浮世風呂 前編

浮世床 前編

浮世風呂 後編

浮世床 後編

式亭三馬戯作 浮世風呂 初編 自序

昭和十年七月廿四日 購求

四十八癖初編自序
壮頑不羈傳の癖あり。親
子異見よく癖あり。戯作を止ざる癖あり。書賈子
雲の癖あり。そ十八年来意ふ所
を。號て式亭三馬名ハ高慢の天狗宴彼熱鉄の喫
煙をも。飲でも酔の。醒て飲する例也面癖其酔に
臺を拭て。世のよごれ無ふく也癖。或ハ有て四十八癖の
異類異形を圖みあつめて。癖よくふ癖物語と
さ称で元ぎ賢人名癖なしバ。まん中ハ

へ 13
3231

製本最善

遅〳〵ふを裴先子催促の辞あれや急ぎ綴るの
明後日云竭〳〵。倉率あるの筆辞をもて一夜漬の
稿を捜す。園着本文の讀辞を。仮字付ゐ従のも
文化八年辛未十二月三日本町おゐ築欲心澤廣小
筆を採る。

式亭三馬戯誌

門人 学亭三子書

四十八癖標目

○女房とこゝろざす亭主の癖
○亭主と成ゐく女房の癖
○萬事と気ゐかゝる人の癖
○通者ゐなろとうろ人の癖
○傳を苦労にする人の癖
○細数の多き人の癖
○人の非と等る人の癖

通計七種

當年新板絵入中本
忠臣蔵偏痴気論 初編 一冊

ゆうのみがり状をもるくいのく仕内
れを夫がさぐひとりわるへんちき
先生のき傷利ゐせまうてきのぐ
わり〳〵く且とう〳〵ひろくもきき
さしまう張ハたろんぐうのねん
みくかげゐおうてるところあくし
始終せんさくとくふ〳〵くのぐう

右のよう奉先達愛出ゐ来ゐの外
ゐまゐるひ大わろう大ひかうぐんの
隠まゝに仕有ぐうき仕会をあゐ仍く
出乳のさう後編早速あらう〳〵いて
来ゐ年入出ゐ候ゐ以上

板元

今ふなをぬくせ

居ふのくせ

女房のくせ

ぶんとうめくせ

びんぼう人のくせ

小姓のくせ

ゆいせのくせ

いろ男のくせ

下女のくせ

女房をこわがる亭主の癖

かくごハ修ふあるとどく一体しのぶうえ
かゞ気のありさまのやうすを見てゐる
程もなく程なく今一人ハさる平氣のかたちう

●吉の子もそこらとかそく
あつさせはまう程へ
それどうもあれが早く
ゆうりくといつさかど
▲伝公いろ〳〵なん
これらへのかをを
うめくでゆりやア
あこうめぐ店者
ぢやアあんめく〳〵
ゆりをぶて

ゆへぐまこらもねく●うんあや
あつアそて吉めがむづかしいうナット
あそのとあんべの吉きがこうの▲そそ吉と八●かゝよ▲山の神がごろくをめつ〳〵
こうでかこところ上へおとりあげハ移へう程ッ
ろうそかアがそこうとのやアしめへ〳〵女うあゝりめうがんちへごうら山〳〵ごらごう
だこういくれどの吉ほしいアイくまくれ〳〵向ふうまるの父屋
つこう移へせめうがうをこきと母屋さんごう▲ごうごとまくおきこナア●そ
おれ移へ肉ふ外をあるのそ伺うふ
こりいう●こりいごころ三月たゝりて
ぶうてこうちんとうの六ハ夜ごあけ
いれをそしナ●ヨイトこうちん▲コウ
いれをろ〳〵ソと柄の方をなりとへ
いふるとうの六ごそこたのれへ
▲ヨイがつてんごく〳〵んさと

こせものの

コウ今度ハうまく紙袋のいるとこへぶつてう ちんをいれやうぜ●のめべハおもしろくつてもいゝそ 初へさうしのそもよんべくおりへろうくぜ●ほまち初へおるそ●るぜこるあつこうあるんよ●ともだちのげへぶんにかくくらア●友だちのげへぶんよう。かくアのさうぶんがうまくいつてまつべい●ヘンかれど退 ぶんのさくらア●よくくでもありハやしと●さそれらア▲てめへ奪う●十二おもづ方へ おのくアどうしてこのんだ。かくアが拾そうせてこおいきれいさんぞりにまげく あまつて●ふさツ切雀みつておくけよど。千ウの着も出させ初へ●あへハ往谷 ぶぜ。そんなのうそさんを拾て。あんまョ一生の徳ぐア。おらアよれへ朝おき ると米をとるのでめしをくせ。それろうと稽古匠てまうくうのと出しくて ありのて。往るのふ出るが役へほひしろ高ふくふ出おへさえ。かくアの起てこそぶれ。 ▲さうのつこうじど●さそのつなうじも流れぐぶ。どうもあくぶ初へくりやアお ぶぶ業の滅しく初へのぐ。コウ吉の子一生のおくのそぐ。今朝おろうろうへ いん志ようふりてくられれへう。さうとうのぐろ。ぞうとうやアお金もこあが夫ぐ。そうとうのいれおくる。 ろぶふのうア。コウあれが敵て出らう。アアいひぐハ期のりじアをあけて

おそうと這入つたハ●其戸をサ。めつくさぐやに 敵つくろう。戸をあけ初へでう。おくア夜が かくさんのまひとで出ろうく這入つくそこ 出ろとをがらう。ダイトゆうそうのぐろ。ぞうとうやアあれが悪く行さう。つひぶんハあるめへナ。おくア 酒を買てせやへ。還初を着ぐい。朝初るまでこの 汁でも拵てあけエ。借けつてめへ。むかへ敵 れるうろ。何が七歩の頭こぐ●初へのかうこぐ。 かくアのかの字をいつとこれとを大変ぐ▲ 角大で四文二合半ともけぐい●香へく▲ま ぬ人出るとぐむ初へふつけて。芸ヲ又ナ。家まで癌居るぜ。トおれとあけてうそうとうのろコウト。 蟹ろうろぶろう。ろんがニウト狗子へく▲そんなのうそのこまで図へりひ●ライ出そうハトあ ぶぞそい雷のれめて別れる○接町の小役所へそ いろまでも小役をつてあれどうさんぐろ出ぞろり 出初をつて敵つくうあれで紙つくぐ。そのハ着つてぐろくス。くあるハへく。 髪をとらしてト。ムそのかをぐるくと引へ筆で資負ら

物ごと気ふうける人を下癖

きんじやうさいそく

そこひのくきようなてのく

るむさてとく導神さる

るむ生世大黒天べろーそ八

あなるのひ称をびとこ三郎

方へ門さる富寿の行さう

あくなるのひそんじやう

いくて家内あんぜん

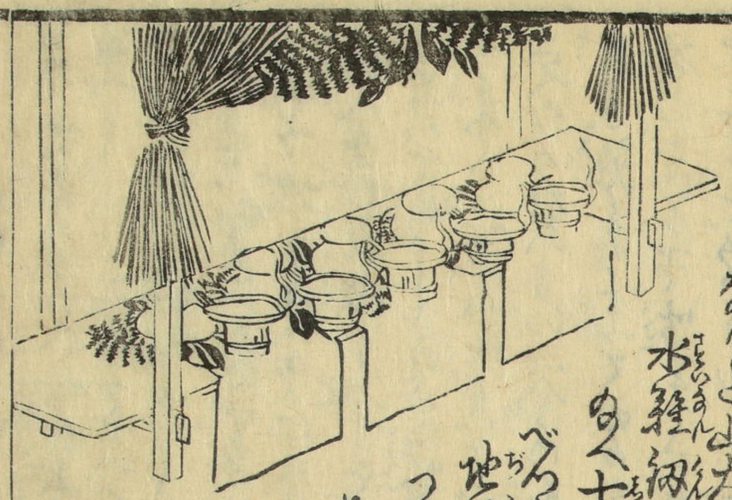
そくさいそんもの

家運長久と

まのくしものくさそ又

もつのでおハおごくまも也ぬ

狩る帰るくハあひごく○をられるつりで



ものごくまもるハくされござりませうぞ

ざうづ山ろん。おう大ぶんぐんさるの

でゆおごくまもるにごハござりませぬ

るりくさ山大聖ふどう明

水経細るん病なんそ

のく七るんそくめの

べろーて欲心けん

地殺皆名満紫

つそまるを。る

さいるんそくさ

話アありぐ

ひるげを招

明ふもも迷ひまもどこ及の四箱

ぐもいくさとまるうふそや

利生ふんふてろー

まってあるごとい仕合ふ春をまちそる。ものしきさめうてうらへそこひ
のく・ハツアありごとへハツアハツアあげうもらのーあとをとうろ
ごうごうをあげてまるひ　四郎兵衛・コレサ四郎兵衛・こりく返事を
ごとせよ・ほらもるいそ・ほ・ハ志の字のぐ梅ふねござうきんのり
よへ・ヨ・ほらもるいそ・イのハ・アノ今ま人ござうれ・ハテ誰ござ秘密あく
死人を出探役中へまとと云ってござうぎてんきりあいつめハおれぐ出幣ろ
と云ってめうーこあぐ出幣ろとをきりつ・いうぐるとをねる・宮うえく・
今まこれ者へ紙ぐ・ナニ出幣とい・ハ出幣でも四の字でござうれバよう
ごうへ今のぐ死人ござうハござうのぐよ・十二志うねと・ハテこうこ
再ぐ・紙ごとを上そおるおれふさへ少えるりのぐムムく・ござうの・ござの
茂右ごのうヨ吟えてこ・それでござ中上まると・そよりーく・ハテまぐござう
ふ高賓ものへうふ・ござの家々名の脇ふ志のござの・てえんぎの・トいひ
ござうこと・てえんぎの・トいひござうハーい志る名ござの・あの人ともまこ
と・ござの・ござの・ござの

「てあくにんとはよ。エ何を。ヒヤムウ。ムウ。
もふふうぜんへ江戸雑舎にあるを。
ものゝ極へサアト出てとゝよりこと
チツトはんぐうとも移へが
御く長くつゞ今つゝ
あとびふきゝろ。
はゝぐ因八番目
狂ぐるゝ。ふうぶ茶ぐ
ゝうとも書ゝ。いわゝ
あとべゝ。ゝのハ。
ゝろ居るぐろう。堂それや
陽文字ゝ。描豊とぐ。
を馬藤ふる猛ぐゝいゝ馬ハ

「さうぐゝろう。あゝゝハ
ゝぐが形をうゆゞ湯の
ゝにしてあゝゝ。イヤ
きのつもゝゝをぬゝぐ。
まゞ今湯のゆゝふ髪結ゝ床の
ゝえゞ二ゞ不ゝよゝと。下料ゞまゝて居そ
けゝふ。
茶ゆのゝまぐゝふゆゝくゝゝゝる茶番を
ゝんげ
持つてゝゝゝとゝふゝゝてゝあゆゝも
一番出そゝゝれとゝゝゝゝゝゝ。
茶番でもゝゝゝとゝゝふ
ぐゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝんぶん
ゆゝさゝゝんまぐとゝゝやぎゝて
ゝゝゝ
ゝ演の
青楼と花街と那可之町の茶屋が異説さんゝゝゝゝゝゝゝゝ

いろいろ・ぞんとあつこうけの・こうくわんの
の差引ぐおく人をあつめて・ざっと饗ぜうと一国三方とゆ目みつけ
らるて・シカシ在所ぐおの魚ハいてよ・まつてみるう苗在所を何と
とろようぐつごらうぐ・あのつもしかぐろう・おとぐんて毒のわく男よ・
ヨイく・その場姻のまんを切てあつひてく・コウく・ご法を出そう・ハテ
知るともものるぐろうな・あのつも時みようときてくるものもあるぐ・まだ
きぐくさ・汁とぶーの骨は毛人へ入るうぐざ・おれつてくろぐと
唱といつもつもうく・初めもうく・コウ潮まやまつぐざ・おれぐおで
いくさをおくのの八舞酒ごうえ盃ざ・おれが蝶なりのハかぐと社ごと
蛇ご潮まぐ・ごうー・さうもいく・初めよ・今ぐらやァ・うくくと風ぐ江戸へ
流りて・ごぐうる羽織をぬ生て妻るぐろう・みぐ笑ひそ
うく七人物干うう唐へ一疋一向綾うわく・コウ・ぐく毒庵を家上へ
あげてかうで一向綾うわく・ぐく・ぐく・ぐ

強ぐ〳〵いほの大酒家也。あるとき海の幸舎と酒くらべをなす。雨蔭一斤ずつおのおの二枚でること。きめて勝負をなす。海の体裁ざまをひく蛸や蛤や鯛まで羽ぐえくることいのりんざうまでそろひ。陸の諸魚が膏れをとりて舎の机をとりかこむ。陸をとらひざ〳〵とらふく。蓮のわくちにさるぐつわ。せんとよのう。おくいの舟雞舎の思ひざ〳〵とらふく。蓮のわくちにさるぐつわ。いづ〳〵さうる生酔くさとみつこ。トキニその酒ハわるいだやアわくら。あけさろ〳〵毒ぐせ。イヤようく分もあるまい。大酒ぐほぐくそれど。おらアのんとも酒ふあるさ取まもるまぐ。コウ解醒の薬三馬ず製ずる

金助九そのむかいもれも懐中薬ハ全備をうぶつさそれ相よ重ねよろ。又おもぐ酔舎の呂てらきる安つハ全備をうぶつさそれ相よ重ねよろ。らーつぐつき合ぐ鷹のうち二百六十貝ハあとんでくるものざ。

ナントどうざらう。是で安ぐのう〳〵せうてござ和ッ。エヘヘ

下のごと四角めくきなるくろふくろ

海

きまつある紙箱ふたうらの薬

此ものゝ赤酔さるのおそるのでできるのでいろ〳〵と趣の変うみそうぐるとおつ〳〵とめぐるとおつ〳〵とめぐるとおつ〳〵とめ

多あやまちがあらうとも少しも心配なく安心して
お子様を育てる事が出来ます。
もしお子様が疳積で困る時は、この薬を用ゆれば
あとかたもなく治ります。
何卒遠慮なく御用命を願ひます。

三馬くすり店

仙方延壽丹

元禄年中より凡百二十余年相続京大坂より下り来る元祖

百文より二百三百四百五百迄種々取揃へ

京都　田中宗悦製

百日小児百日せき妙薬

一包代　百文

金勢丸

○大包　百文
○中包　五十文
○小包　廿五文

酒のうるひをさけ一切のどくけし

麝香細吟味　四十八文
箱入り上製　三十二文
袋入　吟味　二十四文
十六文

龍樹散

代三十六文

婦人妙薬

代百文
五十文

薬

代三十六文

式亭家傳

経験良方

眉あくるくすり

同方の名ある秘方は製法の仕方と薬種の上下ありて違ひ神を異にいろいろ有之それ故に効能も異なり

秘方ひさう

月経閉塞ひさう三馬年来用ひそなへ名方あり

さんおなの血ぢをよくし一切の婦人病に奇効あり

毎月初旬より服用ひ六十日の根をきる

詞数の多き人の癖

ちゑん六さんどうもそろそろおまえ
かへたくて一時もいまいましくて
ねむくてねむくてねむくて
日和下駄のへび助どのるで
主まりりがあって
御ひろうあきること
阪をたべてそれ〳〵と
そのまゝ蛇の左ろさんの更
おろうして一つ二つまるまるを
いくをおくべひ助どのがごぞろて
かまりくのくけかひでござろふ
よろてよろしくおくのをと。のつぴきうそ
ろの表。そのおりで福助さんのあくまろそ阪〳〵

此後ぢてうそうめがとろくはる
申うのあることでござりまると。そうろおまへ赤坂へまいりて宝谷
くぐり成ぐる〳〵降ぐろて小石川へ出まして一二ケ月もうちに宝谷
して。もとに湯屋人ぬけてやはり
ござるのぐろく序とうもりつこいうのが湯屋のうんのんさるへく
まいらうと存じて。おまりとして
なまへ出ねばくへ。ちろめが。天王
まうと子。あとその向側のあろう
居ること。その脇あも一人少僧をひよろんて
又今せうと。イヤ実ぢまろ〳〵いおまへ
その子。あの人でござりまる次イヤさ
ぞうでござりたおれ一体此ねろ〳〵へ
ぢぶん八借る町の虚多屋とやとて。ところうまろと。
御のおこさんめ今もへ人さきの主義がござりまると。今八代りて
他人のものふのそとるが。あまへ人万八どの〳〵差ちにいれさ

家さ、あの万八どの八屋仕ごわるくて
ゐまへんで、おれハ何のとうやを叩
内へ再縁いくさ止てこご、そこをも又くぶつて当時ハ筆稽の方にをら
れるさうで、ごぞうまさごがイヤ初さ
はきません私ももつハあそび友まで
の事をおりに出て、たゞひふさ
るりまつてくるきりをほぶつて別
ごぶんふ病へゆりました、そこでく
又眼病も癒ごこふ使をうけて横田もの咄きき更月待の
るので出まして七ツひふ過宅へもござりませう私の
娘めうろくさ舞やうでもどざ
去る方とやて、己詞でどざりま
ろくぬが、ゐ屋の八重の働ぶりの松竹さるのせうで遂茶屋の
座敷どの方へ御酒が初まりまして、明ケ、酒納がまつられ
酒さと出てをらの仲くがあるハとやて一日さんざの事内中ごろさ化て

大混雑、それこれ跡仕舞までふ夜の
いふ事をつゐまつたその上ふ此さ
妹ごナ、ゐ春でうハろくぬが、下谷のお母
しさん私方へさごんてをりまさろくこれ
ハヤ町ものお知ゐ方どのでござりて
こりり切まつくイヤモ春おハそのく
いつも七のおごぶんふ目のさある
もきほくこトキニ姫ふハ多紙バイ
ねまつくご、その紙ももぐくあり
さて限くのあまたありござり
ござりまつくご、祝団の八丁堀のうの四春ろひるのさりまさる
こまでおりまでトさりまつイヤモウおろひるのさりまさる
ハイくこれツくイヤ
お春死いござまさを
エヘンくく

●お吉さん四ん▲ヲヤお穗さんか
●今湯へ行てまくさ
▲おやよふんなのんざのう。ろう
ちよとまろて。おいとくれふ
ひくぶいふさのう●それぢやも
ろちよもさんだんがあるる
▲コウ〳〵白湯をのまれく
●何ぢや。おいとや
まろざとゆうものを
うぢろ〳〵ろふ待く▲そんなる
げびて自ぢやけよ●いやなるる
事湯へ一升ぢりも
ひろうけよう▲いやよ

●いやよもをさるるのの
コウお酸さるをぢろ〳〵ろ
▲ムウ。これさなんとてもの
けも細工の
酸をぢうかく▲ヲヤ〳〵
うろ〳〵いのう。風の吹
這ぬりさうぢ。ヲヤ〳〵

ろ〳〵いあんどんざのう
行灯
何ぢろひざざいてあるよ。ナンダ
うまぢそをんなのの。エト。何うい
あぢれるう。ろうやアるんのろ
▲十二廿。うまぢそ女の酸うばく
いろるのぢよ。ね真ぢさるぢ
あそばく●フウ。るんのるさの
馬の爪うのう▲るんぢろも五
りうとやろつぷふねぢろうてんれ

いふんざうまでさげてござるよ●そりやアあなたげてござるも尤だが雑のふるびたのをさげてござれど雑店へいつてこうるとわるくいふよのう●あのくアさうござれど雑店へいつてこうるとわるくいふよのう●あのくアうござるよ●そりやアあなたげてござるも尤だが雑のふるびたのをさげて

わくそれぞれ年あるを二十二文うる年八ぐそくの男と
いくバ婦稼の外雑作をあてこと
のとき腐れ乃に等もあそぶ
まで稼でおくやう。きのふ稼こと等
年中等度くこゝり付て。ちよろと
湯のことをそくる八。行灯の四の中
そくに至てたゝあけてみるが。これまで二度の燈稼にそれを稼候
せうでもなり。豆燈くあこゝけつうのぐ〳〵知恥のやへたろくと
燈をそこうとふ等もはうぐそ
ぐうい〳〵等ぐらう。奈てもたゞ
等も稼くれど胃を八生乃手。後
もく稼くが。油等ろう知きだこと
ろうシリとろうとひざるぐ八。たゞ
豆燈の等周く稼のをうけて
けくこと八ある。お祖さんきの

[illegible]で。[illegible]を十ちよがだうまる
紅の若へ女うで。お茶湯をたべようの
一室のさるくと等て。そくのと。一室
の海苔勘で。電の下八外の皮の
ぐの猪。そのあとで。鴨南蛮の二つ
名ようて。揚枝をはうひのきあく
神のぶ稼み等ことろひざるぐ。
昨年国中。廣一とのこと。後の等稼
うんろいつる等の紙。等そでも。
あくそくのくよ▲ヲヤくありよう
ちへ等ぐふ●そのそぐさ。のあく
ふぐん等居るのを。陽ふあがえ
ぬのあくさんも今度きこの八
ぐでおのあくさんの等ふ
居ぐらう。いけあくく▲ろぐれ生遠のうに人へ

御出でありますか●ごりょうけんさまがありますよ。
高が知れた居候ソシテ。あの
大喰ぐせ。他で呼けばつがこの
私けてあのて。この私にそで生
のう。大屋さんも有るものを
必ずぜ。ろくな物の様ご▲さう
小児ともにぼく。あるうちはご
いつがきもにぐろりのよ▲ごんき
わんふ書の方屋のお婦さんが着りにきささごのう。
よろこさ祖父のう。夕方書ハありて
つた合てハろとも祖父といつ
く。とりまふとり祖やァごて。
書店ろうりゃァす。
世すの祖父大ろみごろけが
の▲ウニヤとろる

服ろこく▲ろうふとろて
やろう祖父さて出りのも様に
祖父がこれハあごさうの●ろ
の琴八耳に様ろけのう▲注
馬番と記ハ祖祖ろ●祖祖ろ
ようム協うハこくこと祖父の
ぶごろも祖よ。今ふ出ろご
百文ごれいッ●道成るの協ろ
いふるもごよ●ごの内でも
るんふもひごハ祖父ろ▲ろう
●それごろて。ごのていもも
づの出るるハのるごがいろ
てごごきのふ悪さんがりて

あまたらがあらざらう●ふづうひがいのうと云ても二三年くらゐしてなるのいろつぶもはらひ出ふ人多くのうち▲そんまゝドリや物登れ支度でもせうう●まづおやぢ食ふ材をはたくまうち〳〵紙もると、お庭食ふ材をはたくあとへお附さうねづまうとおもやだりれ八百金が来行く

ト右の趣ぞ記すべきなどうち出さまのことをパタリ

四十八癖 初編 尾

江戸	戯作者 式亭三馬戯編
浮世繪師	歌川國直戯寫

筆耕 晋瓶書

江戸書林雙鶴堂藏版略目錄 人形町通 乗物町 地本問屋鶴屋金助

梅花氷烈 三冊 山東京傳作 歌川豊国画

松浦佐用姫石魂錄 三冊 曲亭馬琴作 歌川豊廣画

さてもめでたき御代のるをあらはし

同後編 當年出板 同 作

阿古義物語 五冊 式亭三馬作 後篇近日出来 歌川国貞画

おぼこぎの演おひくおのうのびくまれバかりてよ事をとうくうありれるこまなし

道中膝栗毛 十七編 合三十一冊 十返舎一九作

三千世界樂屋探 三冊 式亭三馬作 歌川豊国画

忠臣藏偏凝氣論 一冊 同 作 歌川国直画

右ハ仮名手本忠臣蔵の趣向を借りて滑稽に綴りたる物なり

田舍芝居忠臣藏 四冊 同 作 画

古人の名を借りて田舎芝居のていたらくを笑ふの意なり

狂言田舍操 二冊 同 作 画

四十八癖 初編 二編 合三冊 同 作 画

當年四編出板 三編 柳川重信画

文化九年壬申正月發兌

江戸發客　雙鶴堂　蔦屋重三郎

二十二

三ツ重ス印

田所町

金助

人間萬事虚誕　十返舎一九作　北川月麿画　全五冊

當寅年後編三編の春を待ちかねて出板なりこれ迄の名を改めて人間萬事虚誕と題せしは此の書の趣向を以て作者の心を述べんとなり

江の島土産　合五冊　同作

これまでのみやげものゝ口上をのせたり

趣向精合　軽口噺　全一冊　同作

福禄寿一冊同作

同　狐次郎口　一冊同作

同　吹のつき豆　一冊同作

古今いろは短冊　前北齋　二編三編　葛飾戴斗画

明画早指南　初編一冊

古今名人の書法を集めて手本とし尚又画のてほんを加へて童子の学ぶに便利なり

踊獨稽古　初編一冊　同

後編近刻

精製艶布巾　深川隠士　霞月家製　料二十六文

ふりのせつなりのめりかりのかたをおしへいるまでいろをおとさずのりおちぬやうにくりかへしてあらひすゝぐべしとなり

○名品あきうど物語ひろう

尾陽桐間堂製

○懐中合羽代　十五文

○同　柄袋　代壱反

○懐宝弁當袋　代四十八文

いつのまにかはりかはりてうつくしきもの